

令和5年度（2023年度）鞠智城講座 鞠智城の城門構造技術を考える

1 開会（13：30）

2 講演（13：35）

「古代山城の門－九州を中心に－」

講師：九州歴史資料館 埋蔵文化財調査室長 吉田東明

「鞠智城跡深迫門の土塁構造と構築技術」

講師：歴史公園鞠智城・温故創生館 文化財整備交流課長 宮崎敬士

（休憩15分）

3 ディスカッション（14：50）

「鞠智城の深迫門を考える」

コーディネーター：歴史公園鞠智城・温故創生館長 長谷部善一

4 質疑応答（15：20）

5 閉会（15：40）

令和6年（2024年）1月28日（日）
山鹿市菊鹿公民館 大会議室

令和6年（2024年）3月3日（日）
菊池市泗水公民館 大研修室

熊本県立装飾古墳館分館
歴史公園鞠智城・温故創生館



古代山城の門 —九州を中心に—

九州歴史資料館 吉田東明

1. 九州の古代山城

7世紀の東アジア情勢

古代山城とは、我が国の飛鳥時代から奈良時代頃にかけて、西日本各地の山に築かれた城郭施設の総称である。

7世紀前半、朝鮮半島は高句麗・百済・新羅の三国鼎立状態にあった。618年に統一帝国を形成した唐は640～650年頃に全盛を迎え、各方面への侵略を企てるようになる。645年に新羅の救援要請を受けた唐は朝鮮半島に直接介入し、唐・新羅連合軍は660年に百済の都、泗泚（しひ・サビ）城を襲い百済を滅亡させた。

百済の遺臣たちは復興のための援軍を倭国に要請した。齊明天皇は救援のための援軍派遣を決定し、661（齊明七）年に筑紫に遷居するが（朝倉橘広庭宮）、当地にて死去する。中大兄皇子は称制という形で大王位を代行して派遣軍を渡海させ、663（天智二）年に白村江にて唐・新羅連合軍と会戦したが、大敗を喫する結果となった。

白村江の戦い後、倭国に対して唐が新羅と連合することはなく、やがて唐・新羅両国は対立関係に陥る。668（天智七）に唐は高句麗の内紛に乗じて高句麗を滅ぼしたが、同年、新羅と倭国の復交がかない、両国の緊密な交流が行われることとなった。676（天武五）年には唐が遼東へと退却し、新羅は朝鮮半島統一を果たしたのである。



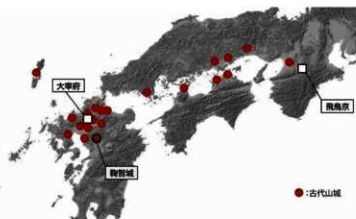
7世紀前半頃の東アジア状況

日本の古代山城

663（天智二）年の白村江での敗戦後、倭国は唐・新羅の侵攻に対する防衛体制の緊急整備が国家的急務となり、このことが山城築造の直接的な契機になったとみられる。『日本書紀』によれば、白村江敗戦翌年の664（天智三）年に対馬・老岐・筑紫国等に防（さきもり）と烽（とぶひ）を置いて筑紫に水城を築き、さらに翌665（天智四）年には長門国に城を築き、また、百済亡命高官の達率憶禮福留（おくらいふくる）・四比福夫（しひふくぶ）を筑紫国に遣わして大野・椽（き）（基肆）の二城を築かせている。さらに、667（天智六）年には倭の高安城・讃岐屋嶋城・対馬金田城を築く。664年以降、矢継ぎ早に行われた防衛体制の構築過程をみると、まずは筑紫国までの情報伝達手段を整備し、次に大宰府を中心とした

防衛網を整え、さらに都に至るまでの海路沿いの要衝に拠点となる山城を築き、防衛体制を構築していった様子がうかがわれる。

現在までに西日本の各地で見つかった古代山城は、22ヶ所を数える(怡土城を除く)。これらのうち、『日本書紀』や『統日本紀』に登場する古代山城は6ヶ所あり、これらは「朝鮮式山城」と呼ばれている。また、記録には登場しないが遺跡として確認されている古代山城も16ヶ所あり、これらは「神籠石(こうごいし)系山城」と呼ばれてきた。「朝鮮式山城」と「神籠石系山城」には構造上の共通点も多く、築造時期も近接すると思われることから「古代山城」と総称されている。なお、文献史料に登場するが所在が分からない山城も5ヶ所ある。



古代山城の分布

九州の古代山城

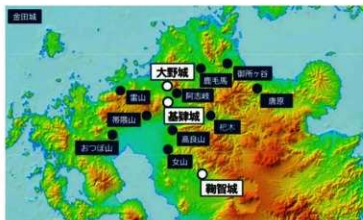
古代山城は、九州北部から瀬戸内海沿岸を経て畿内に至るまでの間の、陸上・海上交通の要衝に置かれており、特に九州の北・中部には古代山城が集中して分布する。その数は14ヶ所を数え、我が国の古代において、内政・外交・軍事の面で重要な役割を果たした「大宰府」の擁護が、国防上の最優先事項だったことがわかる。

九州の古代山城

大宰府は周囲を山々に囲まれた天然の要害の地にあり、北に位置する四王寺山には大野城、南の基山には基肄城、北西の福岡平野へと続く狭い平地部には、そこを塞ぐように水城が築造された。筑後平野に面した東側には阿志岐(あしき)山城が築かれた。さらに、水城の北西には小水城と呼ばれる小型の土塁が3ヶ所で見つかっており、また、基肄城の東側でも小水城に類似する土塁が2ヶ所確認されている。このように、大宰府の周囲には、一連の大宰府防衛構想に基づいて要衝に山城や土塁を築造し、自然地形と一体となって「大宰府外郭線」の形成が行われた。また、大宰府外郭線のさらに外側、各地域で交通の要衝となるような場所にも古代山城が築造された。

大宰府は周囲を山々に囲まれた天然の要害の地にあり、北に位置する四王寺山には大野城、南の基山には基肄城、北西の福岡平野へと続く狭い平地部には、そこを塞ぐように水城が築造された。筑後平野に面した東側には阿志岐(あしき)山城が築かれた。さらに、水城の北西には小水城と呼ばれる小型の土塁が3ヶ所で見つかっており、また、基肄城の東側でも小水城に類似する土塁が2ヶ所確認されている。このように、大宰府の周囲には、一連の大宰府防衛構想に基づいて要衝に山城や土塁を築造し、自然地形と一体となって「大宰府外郭線」の形成が行われた。また、大宰府外郭線のさらに外側、各地域で交通の要衝となるような場所にも古代山城が築造された。

大宰府は周囲を山々に囲まれた天然の要害の地にあり、北に位置する四王寺山には大野城、南の基山には基肄城、北西の福岡平野へと続く狭い平地部には、そこを塞ぐように水城が築造された。筑後平野に面した東側には阿志岐(あしき)山城が築かれた。さらに、水城の北西には小水城と呼ばれる小型の土塁が3ヶ所で見つかっており、また、基肄城の東側でも小水城に類似する土塁が2ヶ所確認されている。このように、大宰府の周囲には、一連の大宰府防衛構想に基づいて要衝に山城や土塁を築造し、自然地形と一体となって「大宰府外郭線」の形成が行われた。また、大宰府外郭線のさらに外側、各地域で交通の要衝となるような場所にも古代山城が築造された。



九州の古代山城の分布

2. 古代山城の構造

土塁・列石・版築

わが国の古代山城の多くは土塁によって城壁が形成される。城壁を石塁で構築する金田城は、我が国では特異な存在である。

土塁は、土を带状に長く積み上げて構築される。土塁構築の際には、まず基底部を念入りに整形して平坦面を造成し、土塁の外端となる位置に石を並べて列石とする。大野城では不整形の割石を並べるが、九州北部の他の古代山城では、ていねいに長方形に加工した切石を隙間なく一列に並べる点に大きな特徴がある。土塁はこの列石の上に積み上げられる。

土塁には一般的に「版築」と呼ばれる積土技法が用いられる。版築はもともと中国の黄河流域で発達した黄土を叩き締めて硬化させる積土構築技法で、朝鮮半島を経由して日本列島へと伝えられた。古代山城の発掘調査を行うと、土砂を堅固に搗き固めながら高く積み重ねた版築の状況を見ることができる。

石塁・水門

古代山城は土塁のみで構築されるのではなく、多くの場合、石塁が併用される。石塁は城壁が谷部を横断する際に構築される傾向にある。大野城の場合、城壁北側に築かれた全長150m、高さ5mの石塁「百間石垣」が有名である。谷部にあるため流水処理を工夫する必要があり、通水溝や水口を伴う「水門」を付設する石塁も少なくない。

城門

城門は、城壁の内外を往来するために必要な施設である。通路は谷沿いを通っている場合が多く、そのため、谷部に構築された石塁に付随して門が設置される場合が多い。



尾花地区土塁／大野城



版築工法模型／水城（九州国立博物館）

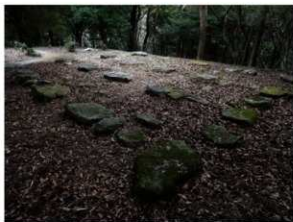


百間石垣／大野城

大野城ではこれまでに 9ヶ所の城門が確認されている。規模が最も大きな太宰府口城門は高低差のない平門（ひらもん）構造、近年新しく見つかった北石垣城門やクロガネ岩城門は通路と門道の間に高低差がある懸門（けんもん）構造である。門礎石も 7ヶ所で確認されている。

内部施設

内部施設については、大野城・基肄城・鞠智城では複数棟の建物跡が確認されているが、九州北部の他の古代山城で建物跡が確認されている事例は非常に少ない。その他の内部施設では、例えば御所ヶ谷の城壁内部にある馬立場と呼ばれる石垣は、貯水池の可能性があると考えられる。大野城でも城壁の内側で井戸状の窪地が複数確認されているが、古代山城に帰属するかどうか疑問視する意見もある。



尾花地区礎石群／大野城

3. 古代山城の門

官衙の門・山城の門

8世紀前半頃に造営された大宰府政庁（第Ⅱ期）では、南門が桁行五間の柱間をもち中央の三間を扉口とする五間三戸門、中門が桁行三間で中央一間を扉口とする八脚門である。大宰府に限らず古代官衙の門、とりわけ正門は、官衙を象徴する構築物として荘厳さが重視される。

他方、古代山城の門は防衛の側面を重視して構築する必要がある。そのため官衙の門と違って間口が狭く、堅牢に構築される傾向にある。

古代山城の門には、段差がなく水平または傾斜した坂道に造られる平門と、大きな段差があり梯子等を使用して出入りする構造の懸門がある。大野城の場合、太宰府口城門は平門だが、クロガネ岩城門や北石垣城門は懸門となることが発掘調査によって明らかになった。クロガネ岩城門や北石垣城門は、門から城内に入るとすぐ山の斜面に直面するため、必然的に曲がって進入せざるを得ない。平門構造の太宰府口城門でも、門の内側に板塀のような遮蔽物を設置しており、直進できない構造を採っている点では同様である。

古代山城では門の下部に石製の門礎石（門礎・唐居敷（からいじき））を設置することが



政庁南門復元模型／大宰府跡

多い。官衛では石製の門礎石を使用せず、木製が一般的だったようである。

古代山城の門礎石にはさまざまな形状がある。形状の差異については、これが時期的な変遷を示すと解釈する見方と、故地である朝鮮半島の系統差に基づく解釈する見方がある。

大野城 太宰府口城門

大野城の大宰府口城門では、7世紀後半から8世紀にかけて三期にわたる変遷が知られている。

第Ⅰ期（7世紀後半）：掘立柱建物で八脚門に近い構造となる。門幅9.3m。

第Ⅱ期（8世紀前半）：瓦葺き礎石建物。地覆石にⅠ期門礎石を転用。門幅5.2m。

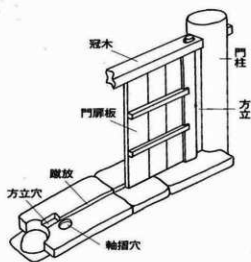
第Ⅲ期（8世紀後半以降）：瓦葺き礎石建物。門道側壁の石垣を修復。

Ⅰ期の門礎石は掘立柱に添えるための円弧状の削り方を設け、方立穴（ほうだてあな）と円形の軸摺穴（じくずりあな）を備えている。両側にあるⅡ期の門礎石には柱を据えるための円形の柱座（はしらぎ）があり、方立穴と小型方形の軸摺穴を有している。大野城ではこれら以外にも形状の異なる門礎石が確認されているため、それらの差異を時期的変遷とみるのか、それとも技術集団の系譜差に基づくものか、意見が分かれている。

大野城 北石垣城門

北石垣城門の門道は、城外側で幅4.7m、城内側で幅4.1mを測り、外側へと少し開いた形状となる。門道の両脇に立てられた柱に接する位置で、それぞれ門礎石が据え置かれた状態で見つかった。門礎石は柱に沿って円弧状の削り方があり、方立穴と方形の軸摺穴が削り込まれていた。これら二つの門礎石のうち、東側の軸摺穴には鉄製の軸摺金具（じくずりかなぐ）が嵌め込まれた状態で見つかった。

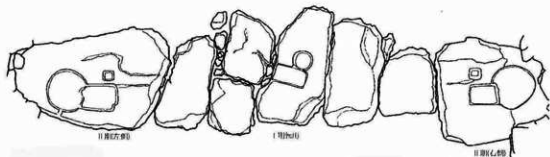
城門のすぐ外側には石垣が築かれ、さらにその外側には平坦面がある。平坦面と城門床面とは1.5mほどの比高差があることから、この北石垣城門は懸門構造であることが分かった。



門の構造（山田雅文 2011）



大野城跡



太宰府口城門の門礎石／大野城



北石垣城門の門礎石／大野城

水城 西門

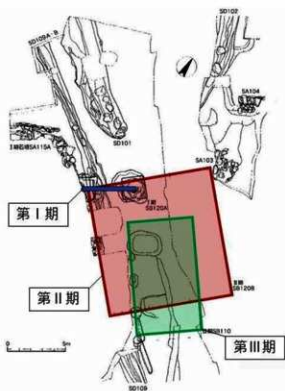
水城は東西に門が設けられ、福岡平野と大宰府とをつなぐ直線的な道路(官道)がそれぞれ通過していた。西門は発掘調査の結果、7世紀後半から8世紀にかけて三期にわたる変遷が確認された。

第Ⅰ期(7世紀後半):掘立柱建物で2本柱。門幅4.2m。通路壁面は石垣積み。

第Ⅱ期(8世紀前半):瓦葺き礎石建ちの八脚門。門幅11.5m(中央幅4.5m)。

第Ⅲ期(9世紀):瓦葺き礎石建ちの四脚門。重層門で門幅5.4mと推定。

変遷の過程をみると、第Ⅰ期は2本柱の簡素な造りで門幅も狭く、側面に石垣を築いた堅牢な城門だったものが、第Ⅱ期には屋根に瓦を葺いた壮麗な造りで門幅も11.5mに広がり、防御よりも外見を意識した構築物に変化したようである。



水城西門

金田城 南門

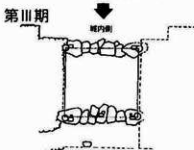
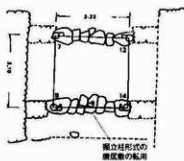
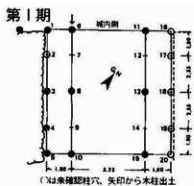
石塁による城壁が周囲を圍繞する金田城には「城戸」と呼ばれる三つの城門の他、新たに確認された「南門」や、内部の土塁に付随する「ピングシ門」がある。

南門の発掘調査では、間口1間、奥行3間の礎石建物跡が見つかった。城外側から2つ目の柱列に扉の軸摺穴がある。側壁には石積みが行われ、床面はすべて石敷である。門の外側から門道部分にかけて階段が構築される点が大きな特徴である。二ノ城戸門では間口1間、奥行2間の礎石建物跡である。城外側の柱列に軸摺穴があり、床面は石敷を行う。

門の種類・構造・幅の事例

※内容は各報告書・論文に基づく

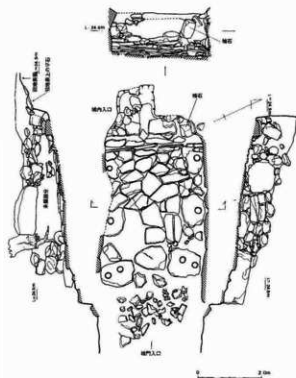
大野城太宰府口城門 第Ⅰ期・平門	掘立柱（3間×4間）	円弧状削り方 方立穴・円形軸摺穴	5.25m（柱間）
大野城太宰府口城門 第Ⅱ期・平門	礎石（1間×1間） 瓦葺き	円形柱座 方立穴・方形軸摺穴 蹴放石列	5.25m（柱間）
大野城太宰府口城門 第Ⅲ期・平門	礎石（1間×1間） 瓦葺き	円形柱座 方立穴・方形軸摺穴 蹴放石列	5.25m（柱間）
大野城水城口城門 懸門	掘立柱（1間）	円弧状削り方 方立穴・円形軸摺穴 蹴放材嵌め込み溝	3.8m（軸摺穴間）
大野城北石垣城門 懸門	掘立柱（1間）	円弧状削り方 方立穴・方形軸摺穴	4.1m（柱間）
基肄城東北門	掘立柱（1間）	円弧状削り方 隅丸方形軸摺穴	約1.9m
大野城原口城門Ⅰ期	掘立柱（1間） 門外に石敷・石垣	円弧状削り方 円形軸摺穴	約3.6m（柱間） 門礎石Ⅱ期に転用
金田城南門 懸門	礎石（1間×3間）	円形軸摺穴（排水溝）	2.38m（軸摺穴間）
金田城二ノ城戸門 懸門	礎石（1間×2間）	円形軸摺穴	2.8m
水城西門第Ⅰ期 平門	掘立柱（1間） 推定冠木門	円弧状削り方 方立穴・円形軸摺穴	4.2m（柱間）
水城西門第Ⅱ期 平門	礎石（3間×2間） 推定瓦葺き八脚門	方立穴・円形軸摺穴 （元位置から移動）	推定4.5m
水城西門第Ⅲ期 平門	礎石（3間×1間？） 推定瓦葺き楼門	方立穴・円形軸摺穴 （元位置から移動）	5.4m



太宰府口城門の変遷



金田城南門



金田城二ノ城戸門

鞠智城跡深迫門の土塁構造と構築技術

歴史公園鞠智城・温故創生館 宮崎敬士

1 鞠智城跡の城門

鞠智城跡でこれまで確認されている城門跡は、東から、深迫門跡、堀切門跡、池ノ尾門跡の計3か所である。いずれも鞠智城跡の南側に位置し、城外から城内に通じる谷部を塞ぐように立地している。また、城跡の北側谷部にも城門の存在が推定されるが未だ確認はされていない。確認された城門跡のうち、深迫門跡、堀切門跡は傾斜の急な谷部に立地するが、池ノ尾門跡は傾斜が比較的緩い谷部に立地するなど、同じ谷部といえどもその立地条件は異なる。そのような異なる地形条件に合わせるように各城門及び付属施設が構築されていると考えられ、その構造解明のための調査を各城門跡において実施してきた。



Figure 1 空から見た鞠智城跡

2 深迫門跡の調査

(1) 位置と特徴

深迫門跡は、鞠智城跡の城域の南を限る外郭線が、その東端で北に向きを変える地点に位置し、城域の南東隅に所在する。また、東方向に開口する谷部を塞ぐように立地しており、そのすぐ西の城内側には池ノ尾門跡に通じる谷の始点がある。門跡の標高は約123mを測る。深迫門跡における発掘調査は、これまで昭和42年度の第1次調査から令和4年度の第37次調査まで7次にわたって実施してきた。これまでの調査によって、地元で「長者どんの石的石(まといし)」と

古くから呼びなわされてきた門礎石のほか、版築土塁やそれに伴う柱穴や石列等を確認している。これまでの調査において、城門の原位置は確認されなかったものの、谷部両側の城壁が版築土塁で構築され、それに伴う柱穴等を確認した。以上のように、城門跡の防御施設の構造とともにその築造方法が明らかとなった。



Figure 2 長者どんの的石

(2) 深迫門跡の調査

第1次調査（昭和42年度）

深迫門跡が所在する谷部周辺の地形測量、門礎石の実測、及び門礎石の埋没状況の把握を目的としたトレンチ調査を実施した。

門礎石の位置については、石の移動目的の穴以外、層序の攪乱がみられなかったことや、門礎石の下位、あるいは同一レベルとなる層から瓦片等が検出されたこと、門礎石の傾斜が根石を抜き取って持ち起こした結果であるとの考え方が合理的であるとするを理由として、原位置に近いとの見解を示した。

また、門礎石の形状は、長軸268 cm、短軸226 cm、厚さ約80 cmを測り、上面は特に加工した痕跡は認められないものの、概ね平滑に仕上げられていることを確認した。この門礎石には長径約20 cm、短径約18 cm、深さ約14 cmの軸措穴が1つ穿たれているが、この軸措穴は、縁が二段となり、完全な同心円を描かないこと、また、鉄製受皿等が存在した痕跡は認められないことなどが観察された。

また、片袖式の門であったかを確認するため、確認された門礎石の対称位置に対となる門礎石の有無の把握を目的として、2ヶ所にトレンチを設定して調査を行



Figure 3 深迫の門礎石

い、その結果、軸摺穴から南へ約 5.8m の地点に、礎石の根石群と想定される直径約 20 cm の石からなる石群を確認した。

第 3 次調査（昭和 43 年度）

城外から深迫門にいたる道路（登城道）の検出を目的として、門跡と門跡北側の尾根にトレンチを設けた調査を実施した。

門跡の調査では、地表下 20～30 cm のところで硬度が増すため、当時の地表面である可能性を示唆した。また、門礎石より約 50 cm の地点で黒色粘土と白色粘土が圧延された状態で検出した。黒色粘土、白色粘土ともに硬く、白色粘土の下に黒色粘土が認められる部分もあり、また、版築状を呈していた。さらに幅 2.8m ほどの浅い凹字状の平坦面を検出し、それが道路跡である可能性を指摘した。その想定道路跡の北側には、約 3.3m の間隔で東西 2 基の柱穴を検出し、道路の境を示す柱穴の可能性を指摘した。

第 16 次調査（平成 6 年度）

深迫門跡門礎石が位置する南東方向に開口する谷頭全域の調査を実施した。

まず、門礎石の原位置を確認するため、第 1 次調査時の調査トレンチを拡大して再調査を実施した。その結果、門礎石は後世に今の場所へ運び込まれたものが、その後、耕作のため半分を地中に落とし込んだものと結論づけた。なお、第



Figure 4 深迫門の構造（第 16 次調査）

3 次調査時に門礎石の地業穴とされた土坑の見解についても門礎石の地業穴ではないと修正した。

また、深迫門跡の所在する谷部の南北両側において版築土塁を確認した。地形は後世に段々畑として造成された関係で段地形を呈し、その 2、3、4 段目の法面から互層の盛土を検出し、谷を狭めるための版築土塁が存在していたことが明らかとなった。おって、谷部の南側から方形状の掘方 6 基を検出し、そのうち 2 基は柱穴を伴い、柱間間隔は 1.8m であった。これについては、版築土塁の裾部に位置し、登城道の南縁に並ぶ杭列であると判断した。さらに、谷部中央の 4 基の土坑のうち 1 基の底部から石列が検出され、版築土塁の下層部の石列と推定した。

第 28 次調査（平成 18 年度）

深迫門跡門礎石の原位置の確認と、深迫門跡の構造、その中でも特に版築土塁の範囲を解明することを目的として調査を実施した。

調査は第 16 次調査の成果に基づいて行うこととし、合計 12 本のトレンチを設定して調査を実施した。

調査の結果、土塁前面に柱列及び石敷きを確認し、それにより土塁の規模及びその範囲が明らかとなったが、門礎石の原位置の解明までにはいたらなかった。

第 16 次調査において、南土塁の東に柱間約 1.8m の柱列の存在が確認されていたが、第 28 次調査によってさらに北側に 1 間分の柱掘方を検出した。さらに北土塁においても、柱の痕跡や掘方を約 1.8m の間隔で 7 間分確認した。その柱痕跡は盛土部分に食い込むような形で検出されており、版築工法における支柱であることを確認した。そのため、南土塁の東側の 6 基及びその北側の 1 基の柱掘方についても、盛土自体はすでに消失しているものの、版築に伴う支柱穴であるものと判断した。

第 16 次調査の際に南土塁裾部で石敷きが一部検出されていたが、第 28 次調査でその延長と土塁裾の石列を確認し、さらに北土塁前面においても確認した。また、土塁前面の柱掘方と石敷きの関係を整理し、土塁本体の構築と石敷きは一連の工程の中に組み込まれていたものと判断した。

このように、土塁裾部を確認したことによって、土塁の延長方向及び規模が明らかとなった。南土塁は北西方向に伸びており、門口を挟んだ北土塁については、北東方向に伸び北側尾根の東端部にとりつく。南土塁の規模は、部分的に残る盛



Figure 5 深迫門の構造 (第 28 次調査)

土から、土塁幅約 6.7m、土塁高約 4.0m、北土塁については土塁幅約 15.0m、土塁高約 4.0m の規模であることが明らかとなった。

第 35-37 次調査 (令和 2-4 年度)

深迫門跡のこれまでの調査で不明確であった尾根上部から登城道付近までの土塁構造と登城道の時期的変遷等を解明するため、第 35 次調査は第 16 次調査で実施した 2 段目の壁面の実測図を完成させること、第 36 次調査は 35 次調査で確認された 3 段積の列石を検討すること、第 37 次調査は門道及び城門の位置を推定することを主目的に実施した。

版築の基底部の構造を確認するためにトレンチを入れ、3段の石積みを検出した。石積みの底面の高さは標高124.5mで版築が確認できる高さは標高約129.5mである。その標高差から土塁の高さは約5mと考えることができる。また、深迫門跡の北側尾根崖面で版築を確認したことから、調査担当者は少なくとも高さ6m以上の城壁があったと推量した。

なお、北土塁南端裾部では、土塁前面の柱穴列が複数列となる状況を検出した。

また、南土塁は、地山を階段状に整形した後に版築したことを確認した。



Figure 6 版築と3段の石積み

3 深迫門跡の調査成果

(1) 門礎石

長軸約268cm、短軸約226cm、厚さ約80cmを測り、石材は花崗岩である。上面には明瞭な加工痕はないものの概ね平滑で、端部に近い位置に1つの軸摺穴が存在する。この軸摺穴は、長径約20cm、短径約18cm、深さ約14cmを測り、2段に狭まる形状をなしているが、完全な同心円にはならない。また、軸摺穴の内部には軸受けの機能をもつ鉄製受皿等があったことを示す鉄錆等の痕跡は認められない。

この門礎石は、第1次調査においては原位置を保っているものと判断された。しかし、第16次調査における再調査の結果、この門礎石は原位置を保っていないものと判断した。

(2) 版築土塁

深迫門跡が所在する谷部を挟んだ両側で版築土塁を検出した。この土塁は城門推定箇所を両脇に取り付いており、広い谷部を遮蔽する目的で構築されたものと考えられる。城門推定部を境として、北側を北土塁、南側を南土塁とした。

北土塁においては、段状地形の上から 2 段目の法面において、茶褐色土を強く叩きしめた土塁の基底部（長さ 10.4m 分、層厚最大 40 cm）を検出するとともに、北端寄りの部分で地山にとりつく土塁の先端部を確認した。3 段目においては、長さ 13m 分の版築土塁を検出した。最大の層厚は 1.6m を測り、20~30 層に及ぶ盛土が積み重ねられていた。それぞれの盛土は層厚 10 cm にも満たないので、粘土を非常に強く叩きしめたものである。盛土には、茶白色、灰茶色、橙褐色、黒茶色のローム層土が利用されていた。4 段目は、北端で凝灰岩の岩盤に取り付く形で版築土塁が築かれている。オリーブ色を基調とする盛土であるが、2 段目の法面のようにはっきりとした分層はできない。また、3 段目の土塁の北東端から 8.9m の箇所には、盛土の上面にひび割れのような縦線の細線が認められた。なお、段状地形の 1 段目においては、版築の痕跡は認められなかった。

南土塁においては、上から 3 段目において長さ 4.5m、層厚 60 cm にわたって黒色と茶色のローム層土を主体とする盛土を確認した。この箇所は谷間の斜面に沿って南側から北側へ向けて緩い傾斜をなしている。4 段目は、谷側が黒色土と灰色土の盛土で、山側が茶色ローム層土の盛土であった。全体的に盛土の層厚は地形に即したもので、谷間の斜面中央部が最も厚くなる。一部でみられた盛土のずれは、上下からの圧力によるものと考えられるが、地震等で生じた可能性もある。なお、段状地形の 1 段目と 2 段目においては、版築の痕跡は認められなかった。



Figure 7 深迫門の版築土塁

南土塁においては、その東側に柱間 1.8m の間隔で並ぶ柱穴を 7 基、北土塁の裾部でも柱間 1.8m の間隔で並ぶ柱穴を 8 基確認した。特に、北土塁の柱痕跡はやや盛土部分に食い込むような形で検出されており、これら一連の柱穴は版築工法における支柱の痕跡であると考えられる。

また、土塁の裾部には石列と石敷きが存在することを確認した。

南土塁では、石列は安山岩系の 30～45 cm 大の計 4 石の石材が前面を揃えるように整然と並べられていた。さらに、この石列前面には、土塁裾部に平行する幅 1.2m の帯状の石敷きを確認した。これらは外に向かい勾配約 16 度の傾斜で下る。この石敷きには、10～30 cm 大の安山岩系の石材が主に使用され、軽石も使用されていた。石敷きの前面は不揃いで、上面を揃えるような意識は認められない。石敷きの上面には、盛土がなされていると考えられる。

北土塁では、石列は計 3 石分を確認し、土塁前面から奥に向かって約 17 cm 入る。この石列の前面に、土塁裾部に平行する幅約 70～80 cm の石敷きが存在する。なお、版築の基底部の構造を確認するためのトレンチで検出した 3 段の積石は版築内部にあり、石列とは異なる様相を示している。

これらの石列と石敷きは、ともに上面を同じレベルで揃えているようではあるが、石材がまばらであり、また、外縁部の仕上げが粗雑であることから、見せるという意識が低い状況がみられる。また、土塁前面の支柱と石敷きの関係であるが、南土塁の支柱の掘方の上面には石敷きがないことから、石敷きと支柱は一連の土塁の築造工程の中に組み込まれていたものだと判断される。

以上のように、土塁裾部を確認できたことにより、土塁の延長方向と規模が推定可能となった。南土塁は北西方向に延びており、門口を挟んだ北土塁については、北東方向に延び、北側尾根の東端部にとりつく。土塁の規模は、南土塁が幅約 6.7m、高さ約 4m、北土塁が幅約 15m、高さ 4m 以上と推定される。なお、この深迫門跡の土塁は、北土塁における背面端部の整形状況から内托式の土塁であると想定される。



この文書は、鞠智城跡の総括報告書『鞠智城跡Ⅱ』と各調査報告書の記述を基にしています。

鞠智城跡の報告書やパンフレットは(独)奈良文化財研究所「全国遺跡報告総覧」から無料ダウンロードできます。

鞠智城講座 発表資料集

令和5年度（2023年度）鞠智城講座

鞠智城の城門構造技術を考える

令和6年（2024年）1月28日 第1版発行

編集 歴史公園鞠智城・温故創生館

〒861-0425 熊本県山鹿市菊鹿町米原 443-1

発行 熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本県熊本市中央区水前寺 6-18-1



鞠智城跡は、令和6年2月27日に史跡指定20周年を迎えます。

鞠智城シンポジウム、鞠智城跡「特別研究」、発掘調査報告などの書籍、ガイドブック、パンフレットなどを、(独)奈良文化財研究所が運営するホームページ「全国遺跡報告総覧」から無料ダウンロードできます。

「全国遺跡報告総覧」はこちら <https://sitereports.nabunken.go.jp/ja>



この電子書籍は、令和5年度(2023年度)鞠智城講座 鞠智城の城門構造技術を考える を底本として作成しました。

底本は、令和5年度(2023年度)鞠智城講座の発表要旨集として令和6年(2024年)1月28日に第1回会場(山鹿市菊鹿公民館)及び令和6年(2024年)3月3日に第2回会場(菊池市泗水公民館)で参加者に配付されました。

書名：令和5年度(2023年度)鞠智城講座

鞠智城の城門構造技術を考える

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺6丁目18番1号

電話：096-383-1111

URL：<http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：西暦2024年3月20日